

2020 年度 南相馬市地域課題解決調査研究事業

一橋大学社会学部小林ゼミナール調査報告書

相馬野馬追にみるレジリエンスと今後の発展可能性を考えるフィールドワーク

2021 年 3 月

一橋大学社会学部小林ゼミナール

1. 調査の背景

本調査は、南相馬市による地域課題解決調査研究事業の支援を受け、一橋大学社会学部小林多寿子ゼミナールの学生がフィールドワークを通じて南相馬市の地域課題を見だし、解決の提言をおこなうことを目的として実施した。2020 年度のテーマは、「相馬野馬追にみるレジリエンスと今後の発展可能性を考えるフィールドワーク」である。

小林ゼミナールでは、2016 年 7 月に避難指示が解除された直後の 8 月以来、南相馬市をフィールドとして調査実習活動が続けてきた。2020 年度は、これまで 4 年にわたって取り組んできた南相馬市での調査活動をもとに、前年度の相馬野馬追調査を引き続き展開していくことにした。なぜならば、2020 年春以来の新型コロナウイルス感染症流行拡大により、5 月には 2020 年度の相馬野馬追が無観客で神事のみおこなうという決定がなされたからである。お行列や甲冑競馬、神旗争奪戦、野馬懸など、前年に見学した野馬追のおもな諸行事がすべて中止となり、東日本大震災・原発事故を乗り越えてきた相馬野馬追があらたな困難に直面している現状を知った上で、ゼミ生が中心となり調査をおこなった。

これまで幾度なく存続の危機に立たされ、それを乗り越えて現代に継承されてきた相馬野馬追は、新たな困難を乗り越え復元できる力という意味でのレジリエンスを有しているのではないか、地域で培ってきたレジリエンスは今後の野馬追の発展可能性へいかにつなげていくことができるか。このような問いのもとで 2020 年度の調査課題に取り組むこととした。

2. 調査の概要

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言が4月7日に発出されたため、南相馬市でのフィールドワークの実施は夏まで待つこととなり、5月から7月までは、現地調査の事前準備をおこなった。

8月末から2021年3月まで、2回目の緊急事態宣言期間をはさんで、南相馬市の関係者各位のご協力をいただき、7回におよぶフィールドワークを実施することができた。

現地フィールドワークは、新型コロナウイルス感染症の発生状況と感染防止対策に細心の注意を払いながら、つぎのとおり、実施した。

| 日時 | 訪問先 | 訪問人数 |
|-----------|---|----------|
| 8月27～28日 | 南相馬市市役所 相馬野馬追執行委員会事務局 南相馬市博物館 五郷騎馬会関係者自宅 | 5名 |
| 10月17～18日 | 雲雀ヶ原祭場地 南相馬市博物館 | 5名 |
| 11月20～21日 | 南相馬市市役所 観光交流課 南相馬市博物館 北郷騎馬会関係者自宅 小高郷騎馬会関係者自宅 | 5名 |
| 3月7日 | 北郷馬遊館 | 4名 |
| 3月8日 | 南相馬市市役所 相馬野馬追執行委員会事務局 南相馬市役所 コミュニティ推進課 | オンラインで実施 |
| 3月20～21日 | 小高郷騎馬会関係者自宅 | 3名 |
| 3月23～24日 | 南相馬市馬事公苑 NPO 法人相馬救援隊 | 2名 |

3. 調査結果

私たちは、南相馬市で相馬野馬追にかかわる方々のご協力を得てコロナ禍における野馬追を考える機会をえた。2020年度に実施されたフィールドワークは、ふたつの側面があったと思う。ひとつは、コロナ禍において直面している困難を、これまでも幾度の困難を乗り

越えてきた相馬野馬追がいかにして対処しているのかを探る「コロナ禍にある相馬野馬追のフィールドワーク」の記録である。野馬追に関わってきた調査協力者の方々によってさまざまに語られ、また、野馬追が培ってきたレジリエンスとして、その課題も含めて考察した。

もうひとつは、コロナ禍という状況のなかで自分たちがフィールドワークをおこなうことそのものについて考え、模索しながら実践された過程としての「コロナ禍のなかでのわたしたちのフィールドワーク」の記録である。現地調査では感染対策を徹底するために行程や方法を工夫し、zoomを使用したオンライン・インタビューなどをはじめとして、コロナ禍をめぐる社会的な情勢の変化と密接に連動しながら試みた。

コロナ禍のフィールドワークは、これまであたりまえとされていたことがおおきく変容していく社会状況において、その困難のなかに囚われながら、だからこそなができるのかを、あらゆる困難を乗り越えてきた蓄積に学び、ともに考えていく営みでもあった。

2020年度に7回にわたる相馬野馬追をめぐるフィールドワークをとおして学生一人一人が各自のテーマをもって調査に取り組んだその調査結果の概要は、以下のとおりである。

「実態を考えると女性の手助けがないと野馬追なんてできないから。」そう語る野馬追関係者の発言を聞いて、私は表舞台に立ち注目を浴びる騎馬武者の出場を「陰ながら支える家族の存在」に焦点を当てて、伝統的祭礼、相馬野馬追の考察を試みた。複数回にわたる聞き取り調査を経て、かつては野馬追への出場にあたる障壁は高くなかったが、時代の変遷の中でその形を変え、祭礼の開催や祭礼への出場には家族の支えが欠かせない形式に変化してきていることが分かった。その中で出場者の家族がサポートを「無償の家族愛」と表現していることが印象的であった。また、伝統的祭礼への家族ぐるみ・地域ぐるみでの参加が、結果として地域コミュニティに根差したアイデンティティの形成に寄与していることも窺えた。祭礼への参加により、同じ時代と空間を共有して生きる者同士の「横のつながり」、地域の人々が培ってきた先祖から子孫へ世代を超えて受け継がれてきた「縦のつながり」が築かれ、継承されていた。そのプロセスが繰り返されていることにより、千年以上途絶えることなく現在も地域に根付き愛される祭りとして存続しているのではないかと感じた。(阿部 謙太郎)

野馬追の持つレジリエンスの力というものは、地域コミュニティの再生や地域の復興にポジティブな影響をもたらすのではないかと考え、その足掛かりとして北郷騎馬会の研修棟である「北郷馬遊館」に焦点を当てて調査を行った。「北郷馬遊館」は野馬追のためのコミュニティ形成や後継者育成を目的として、今後は騎馬会以外の方々も利用できるような施設を目指しており、野馬追の伝統継承や地域の活性化に繋がると感じた。一方で、縁故のない人たちを野馬追に取り込むことは非常に難しく、騎馬会という組織がよりオープンになるには後継者育成以外にも野馬追への参加ハードルを下げるなど工夫が必要だと考えている。(石井 遥菜)

私は調査実習の中で4回南相馬市を訪れた。インタビューを通じて感じられた、野馬追関係者が野馬追にかける想いの強さは想像以上であった。インタビューの中で聞かれた野馬追のために生きる、という発言はそれだけ野馬追を続けることが困難であると同時に、野馬追に詰まる魅力があることをうかがわせる。一方で、祭礼が関係者内で閉じている、という特徴があり、それだけに野馬追が地域全体のレジリエンスになり得るかというところは、そうだとは言い切れない側面も見つかった。最後に、調査実習を通じて多くの人の時間を頂戴し、貴重な語りを聞かせていただいた。その感謝を申し上げると共に、2021年の野馬追が無事開催されることを願っている。(鈴木 壮一郎)

コロナウイルス感染拡大防止のために無観客で神事のみが執り行われた2020年の野馬追は、その特徴から省略野馬追とも呼ばれている。調査の結果、省略野馬追では上げ野馬神事などの重要な行事が行われることで、伝統的祭礼が存続したと捉える人と、存続には十分でないと考えた人がいる事がわかった。特に祭礼当日の指揮を担う騎馬武者は野馬追への参加を重視しており、参加することで保たれるモチベーションや生活リズムがある事が判明した。また、野馬追に参加するためには多額の資金や時間、乗馬技術などが必要であり、その参加ハードルの高さは祭礼の後継者問題とも相まって議論がされている。しかし、参加ハードルの高さは祭礼の魅力の一因となっており、むしろその難しさが騎馬武者の継続的な参加を促している側面が見出せた。これらの結果から、野馬追には後継者不足や地域住民の関心低下などの課題があるが、祭礼の参加ハードルを下げずとも、馬文化そのものを身近にしていく事が重要であると考察した。NPO法人相馬救援隊の活動はそのモデルケースとも言えるだろう。地域の子どもが将来的な祭礼の後継者となることを踏まえて、馬文化を広めていくことを重視する必要があることがわかり、馬に触れることのできる地域としてのまちづくりや、引退馬の受け皿という野馬追の特徴を生かした観光化などを提案した。(津野 信)

相馬野馬追は後継者不足が長年の課題であるものの、一度出場した人をとらえて離さない魅力があることもまた事実である。震災と原発事故による被害を乗り越えてでも出陣やそのバックアップを続ける人々に共通する野馬追の求心力は何か、という問いを立てて調査を行った。騎馬武者の方やNPO法人相馬救援隊の方にお話を伺うと、「馬の魅力」がキーワードになっていることに気づいた。各家庭の飼い馬からレンタルされる引退競走馬まで色々な馬が祭りに出場するが、いずれにしても日々の繊細なケアや乗馬技術を要求する、一筋縄ではいかない動物である。逆説的だが、このようなハードルがあるからこそ馬上からの風景、合戦の疾走感といった非日常的な祭りの魅力に取りつかれる人が多いようだ。内部の人から見れば当然のことかもしれないが、これは相馬地域に特有の求心力であると外部の観察者である私の視点から考察した。(前川 あまな)